

木枯らし・雪に舞う母

小林守城

私の原風景をどうやらさぐりあてた。
それは、木枯らしから始まった。

木枯らしを馬上ににらむ男かな 良寛

凧の果てはありけり海の音 言水

凧の吹きゆくうしろすがたかな 嵐雪

木がらしや目刺にのこる海のいろ 芥川龍之介

海に出て木枯し帰るところなし 山口誓子

木枯らしや百舌の速贅残しけり 守城

心象の底を探っていくと、木枯しは田舎暮らしの母への郷愁が
連れ立っていて、百舌の速贅は少年時の私であった。

木枯らしや風花が舞うと水車小屋にいったままの

粉まみれの母がまちどおしい。迎えに行くしかない。

(水車小屋)

雪は薄墨に暮れて 川向こうの水車小屋で

米を搗く赤い母がいる 十三回忌を迎えても

大輪の回るギィー音に包まれて 粉にまみれた母がいる

雪が縞模様曲がりこみ 電線がブルルンとたわみ

まだ帰らない母がいる 迎えに行った水車小屋には

粉にまみれた母がいて ベロでおれの目ん玉の

ゴミをぐるりと挟りだした あの赤く濡れた夕暮れを

誰にも知られたくはなかった

木枯し吹いて、やがて風花が舞い雪に暮れる。

ボロもんぺ 好きかと問えば好きだよと

笑いし母の通夜に雪ふる 船村 徹

あわ雪の中に頭ちたる三千太千世界

またその中に沫雪ぞ降る 良寛

まことひとひと 索むるは 青き Gossan

銅の脈 わが求むるは まことのことば

雨の中なる真言なり 宮沢賢治

(畏れ多くも、「雨の中なる」のところ、「雪の中なる」と
秘かに私は読み替えている。)

雪は天から送られた手紙である 中谷宇吉郎

天からの君が便りを手に取りて

よむすべもなき春の淡雪 中谷静子

生死の中の雪降りしきる 山頭火

私にとって、雪についての詩文の極みはこれである。

かつて 放浪の俳人山頭火のこの句を

一行の詩があればおれは生きられる

ことばの宝石として 座右銘の一行詩として

わたしは心深く護持してきた

わたしの詩の直覚はいい線いつていた

だが不覚であった その句の序には

「生を明らめ死を明きらむるは

仏家一大事の因縁なり」とあったが

その次はなかったのだ

大切な人の通夜のことである

導師が突然 修証義の序を唱え始めて

その次がでてきたのだ

「生死の中に仏あれば生死なし、・・・」

ああ その時わたしは打たれた

そして開かれたわたしの式場に

稲光と共にしずかな雷鳴を見た

雪は仏であったのだ

そして 雪は郷愁の母であった

鬼子母神の夕映えの尻を追い

棒持ちちて 藪を行く

少年なりしころ

* 今年は何の二十四回忌